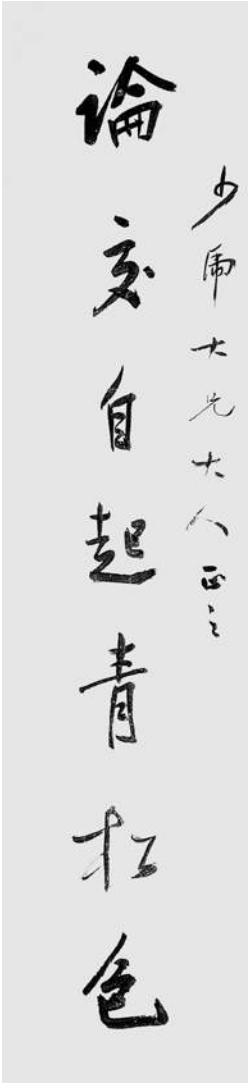
名蹟紹介

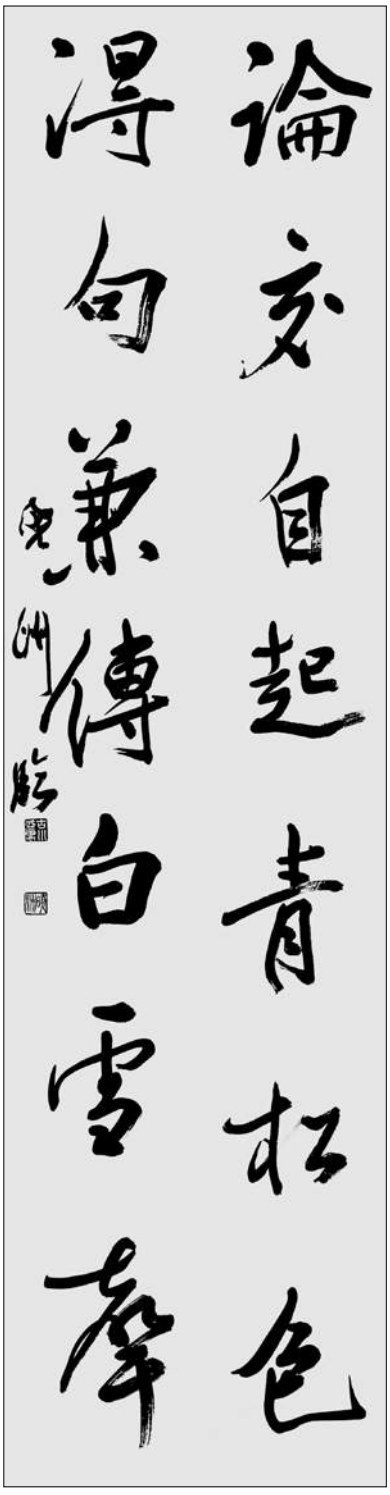


陳鴻寿（ちんこうじゅ）

（1768～1822）

浙江銭塘の人。字は子恭、曼生と号した。現在の山東省や江蘇省の県知事を歴任した。文章・詩文に優れ、書は特に隷書に優れ、創意があった。江蘇省の県知事であった時、隣接する宜興県は砂壺の生産で知られていたが、自身も18種類の砂壺のスタイルを考案し、また、砂壺の本体に装飾として銘文を刻することも考案し、そうして制作されたものが、後に「曼生壺」と呼ばれて人気を呼んだ。

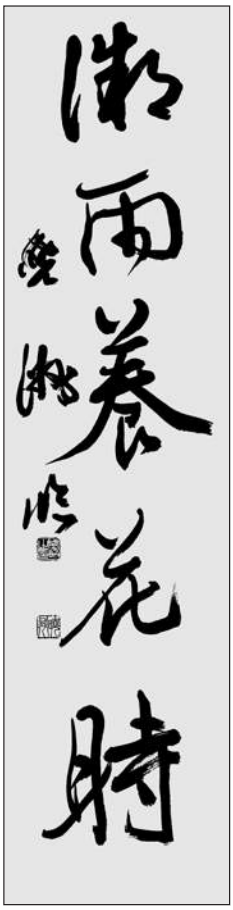
篆刻は丁敬・黄易を宗とし、その師法を基礎に自由で堂々とした作風で、印刀はまるで筆を使うがごとくだった。



論交自起青松色　得句兼傳白雪聲

（136×35㎝）

微雨養花時



（68×17.5㎝）

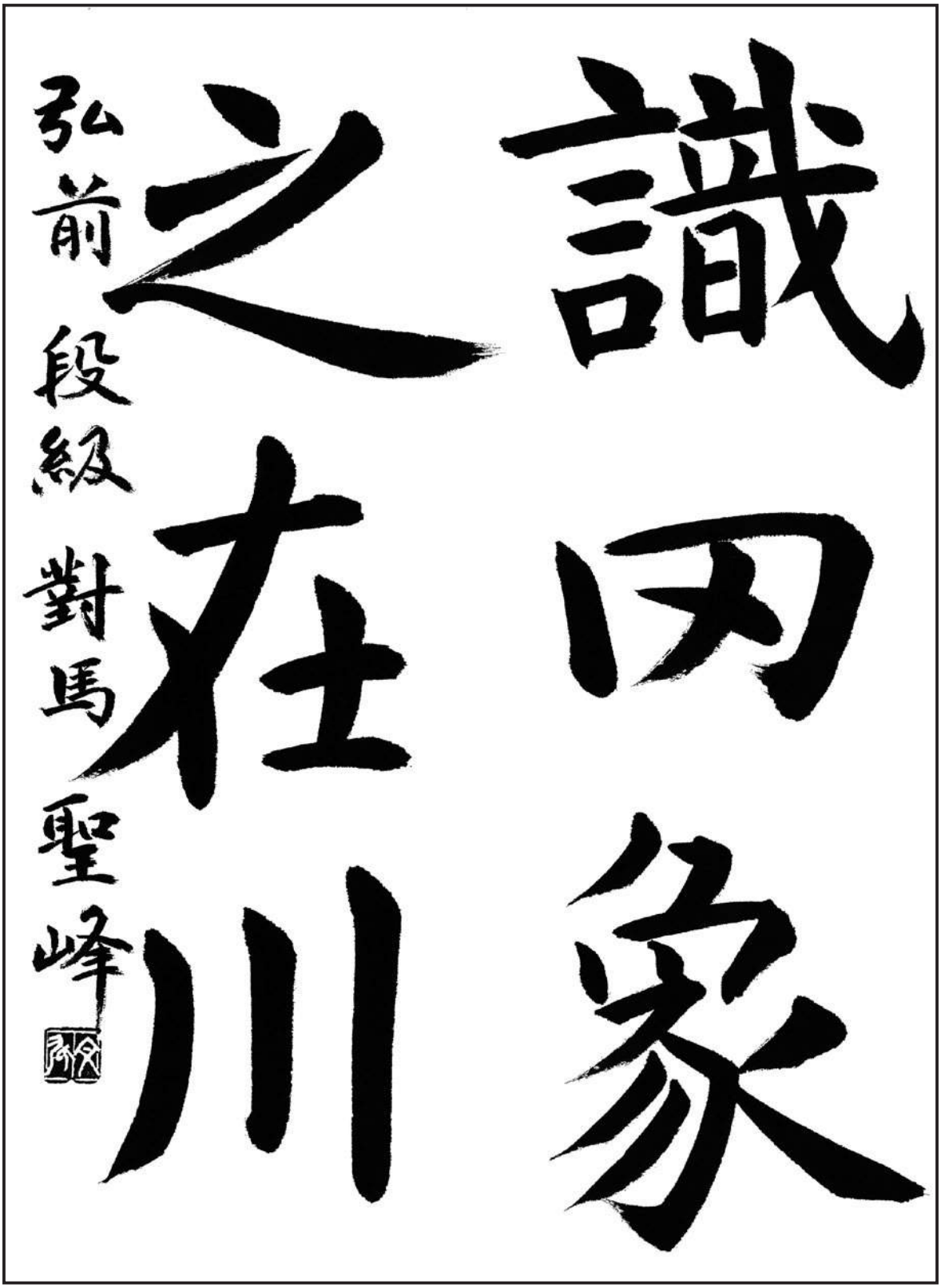
陳鴻寿の行書七言聯は上品な感じの行書であるが、書法上の基礎がしっかりしているため、細いのにほどよい太細の変化もあり、単体でありながら脈絡がとおっていて文字の構造、結体上に一切の揺るぎもみえない爽快で私の好きな作品である。その作品が聯であるのに半切にまとめたので窮屈にみえる。臨書する場合、その作品のサイズがはっきりしておれば寸法を守ったほうがよい。仮名は勿論漢字にもあてはまることである。陳鴻寿の県知事時代の伝えによると、常に清廉公明でかつ果断で英才であり、学校の創設や救済事業を営むなどよく勤め、大変信頼が厚かったといわれ〝事実求是〟をモットーに、実証に基づいた学問研究法を確立しようとし、さまざまな分野の学問に大きな影響を与えた。

古川暁洲

10月号　　楷書臨書課題（漢字半紙部）　對馬聖峰臨

※出品段級位（漢字半紙部 新級～八段）

※弘前の部分には支部名を書く



使用筆（花林）・使用紙（無罫半紙・桐）・使用墨（黒耀）

楷書臨書課題解説

孔子廟堂碑（虞世南）

識　縦に3つの部分に分けてまとめ、余白はほぼ均等に。しは主画になるので長めの暢達した線で。

罔　全体に横広な形にまとめる。外の縦画は内に入れ、うまくバランスをとる。中のメの位置に注意して、余白を広くあける。

象　最終画を長くはらうので全体に中心より左に寄せて書く。左下の斜画は放射状にはらう。

之　それぞれの画の方向に留意し、横広な形にまとめる。最終画は長くのびやかにはらう。

在　1画目はあまり長くしない。2画目は除々に筆圧を加え、ゆったりとはらう。土の位置に注意し、下部で広がり安定させる。

川　始筆・終筆の高低に留意し、縦間隔は均等にする。それぞれの終筆部分の違いを考えて書くこと。

原帖

〔識罔象之在川〕罔象の川に在るを識り、

10月号　　行書臨書課題（漢字半紙部）　古川暁洲臨

※出品段級位（漢字半紙部 新級～八段）

※弘前の部分には支部名を書く

使用筆（花林）・使用紙（無罫半紙・桐）・使用墨（黒耀）

行書臨書課題解説

蘭亭叙（王羲之）

原帖

〔以遊目騁懐足〕 目を遊ばしめ懐を騁する（所）以にして……足れり

〔以〕 中央部の余白を広くあけて、横広に書く。右側の始筆は高い位置から書き始める。

〔遊〕 **方**のくずし方は手へんのようになり、**辶**は位置に注意し、下部に余白を残す。**辶**は1・2画目の間をゆったりとあけ、最終はらいは重厚に。

〔目〕 1画目縦画をしっかりした線で引く。下部の組み方に注意し、右側の縦画は長めに下に出す。

〔騁〕 **馬**の筆順に注意（骨法参照）する。4つの点は省略され、なめらかに右上へはらう。旁上部の**由**の中央縦画は頭部を長く出す。

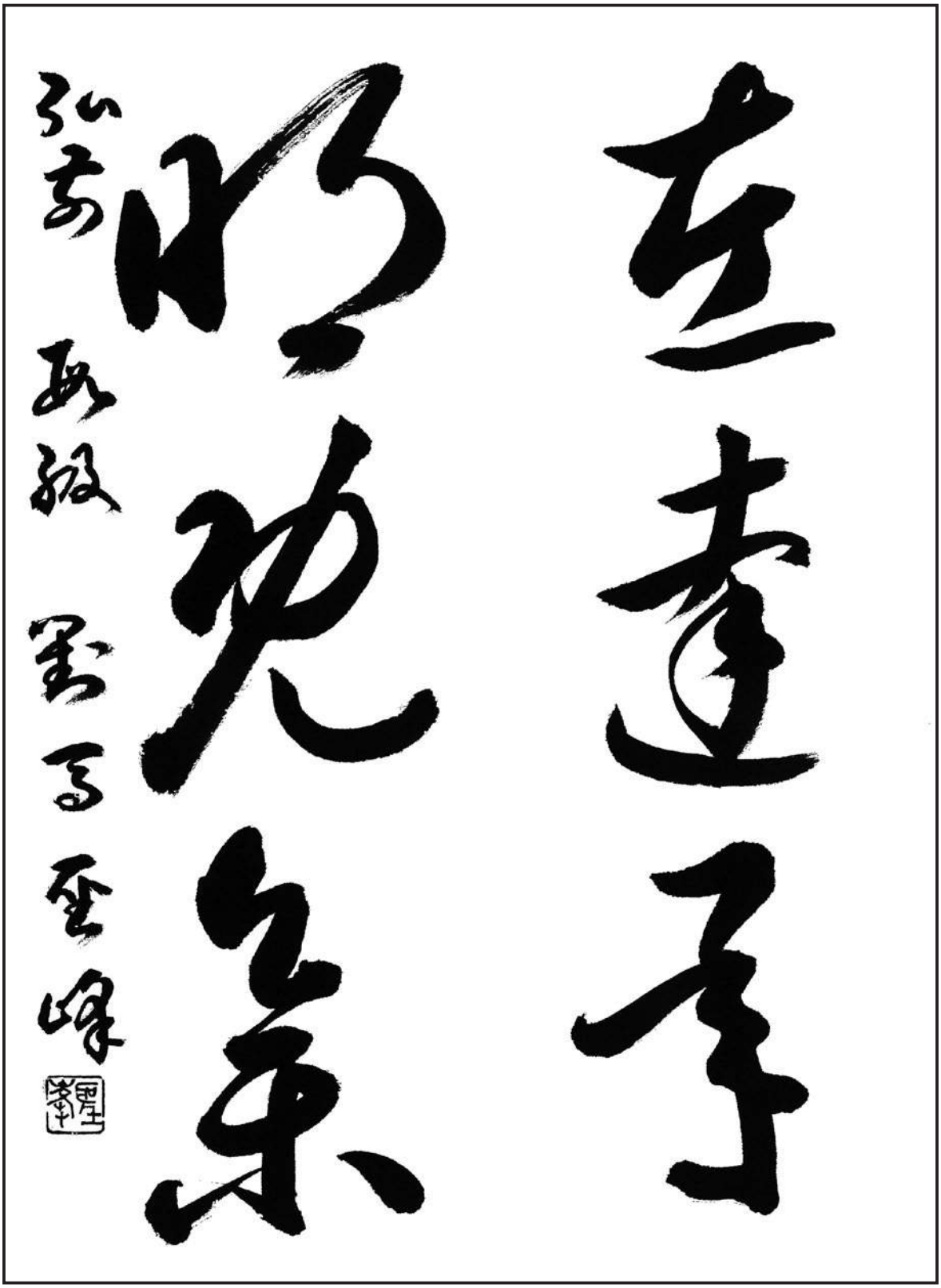
〔懐〕 偏と旁の間を広くあける。旁の上部を密に、下部は疎になるが、動きを大きく。

〔足〕 **口**を大きく書きすぎないようにし、左右縦画を引きしめて。最終画の終筆は筆の抜き方に注意する。

10月号　　草書臨書課題（漢字半紙部）　　對馬聖峰臨

※出品段級位（漢字半紙部 新級～八段）

※弘前の部分には支部名を書く



使用筆（旭水）・使用紙（無罫半紙・桐）・使用墨（黒耀）

草書臨書課題解説

真草千字文（智永）

〔左〕 筆を充分に紙背に通し、じっくりと運筆する。空間のとり方にも配慮し、すっきりと見せる。

〔達〕 全体に縦長にまとめる。途切れている線もしっかり気脈を忘れずに。最終画は軽くすくい上げる感じにする。

〔承〕 右へ倒れる縦画を、長い横画でバランスをとっている。画の方向をよく見て書くこと。

〔明〕 偏は筆圧をかけて太く。旁は軽快なタッチで。偏と旁の空間を広くあける。

〔既〕 右上から左下への長い斜画は、しっかり筆先で当たって入筆し、鋭い直線で。全体に下部で広がりを持たせる。

〔集〕 上部は密に、下部は除々に広がり明るくなる。文字の中心を考え、上下がずれないように配置する。

原帖

〔左達承明既集〕 左は承明（しょうめい）に達す。既（すで）に（墳典（ふんてん））を集め、

10月号　　中字課題（漢字半紙部）　　佐々木彩苑 書

※出品段級位（漢字半紙部 新級～八段）

読み―老樹波に臥して寒影動く。

意味―古木が波立つ水面に映って寒そうに揺らぐ。

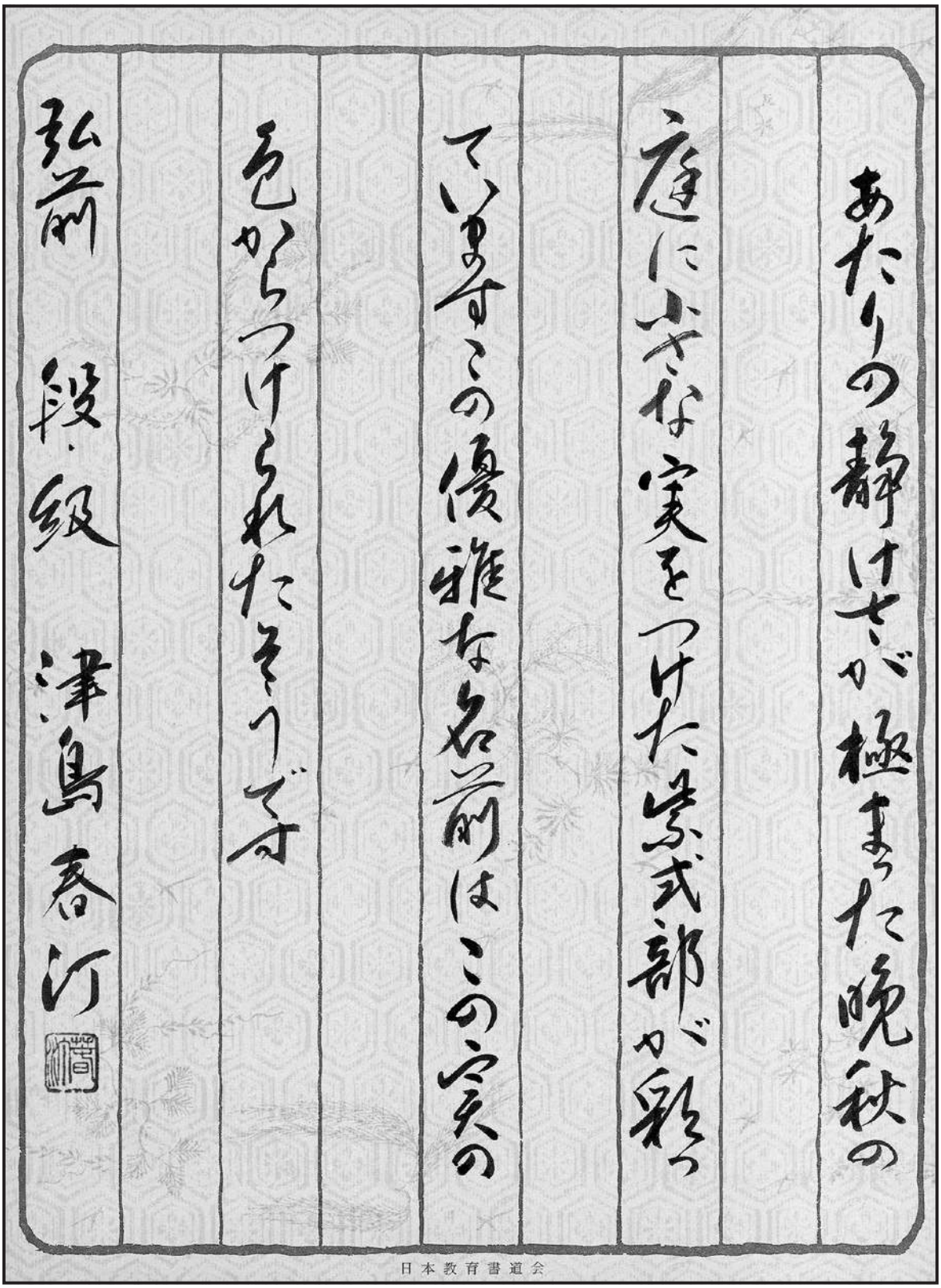
◎19頁に部分解説があります。

使用筆（天開）・使用紙（中字用半紙）・使用墨（書芸呉竹〈固型〉）

※弘前の部分には支部名を書く

※出品段級位（調和体部 新級～八段）

◎19頁に部分解説があります。



読み―◎あたりの静けさが極まった晩秋の　庭に小さな実◎をつけた紫式部が彩っていますこの優雅な名前は◎この実の　色からつけられたそうです

（◎印墨つぎ）

※**弘前**の部分には**支部名**を書く

使用筆（からまつ）・使用紙（調和体用紙）・使用墨（書芸呉竹〈固型〉）

漢字条幅漢詩課題

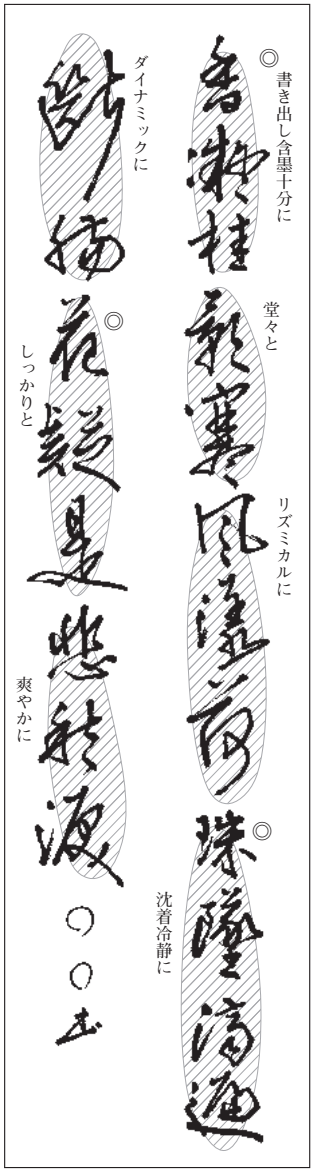
漢字条幅部
※出品段級位（新級～八段）

行草の作品は流れが大事ですが、ただずるずると筆を運ぶだけでは決して美しい書きぶりはできません。運筆の要所要所で「間」をおいて書く心持ちが大事です。「間」をおくというのは、そこでじっと止まっているのではなくて、一瞬筆を止めて、その瞬間に筆に或程度のバネがかかりますから、その弾力を利用しながら運筆します。この運筆は微妙なコツですが、このコツを練習によって会得して下さい。どうしても出来ないときは、師匠や先輩の書いているところをじっくり見て下さい。必ず「間」をおいて筆を運ばれていると思います。運筆の「間」は筆の性能を活かす重要なポイントです。

あと点の存在感については、点そのものの筆づかいによりますが、その多くは次の筆画と離すこと、字座の外に書くことによって、より作品効果をあげ、点の存在感を鮮明に見せることができます。

『文字造形の妙味というのは、個々の文字を格好よく書くだけではなく、他と形式を変えながら調和を図ることと心得て頂きたいと思いますが、珠に隣接の文字とは表現をダブらせないことが肝要です。ここに掲げた拙作は一参考作品ですので、自信のある方は自己の表現を試みられては如何。』

（『　』内は岡田契雪先生より）



使用筆（白神）・使用紙（漢字条幅用紙半切・梅花箋）・使用墨（頂煙翰墨自在〈固型〉）

岡田契雪先生書

〔香凝桂影寒　風漾荷珠◎墜　滴遍斷腸花◎　疑是悲秋涙〕張芬

読み―香は凝り桂影寒く、風漾いて荷珠墜つ。滴りて断腸花に遍し、疑うらくは是れ秋を悲しむの涙。

意味―露の香りは桂につめたく結び、風がゆれると荷の葉の真珠はこぼれる。秋海棠の花にもれなく滴って、秋を悲しむ涙かと疑われる。

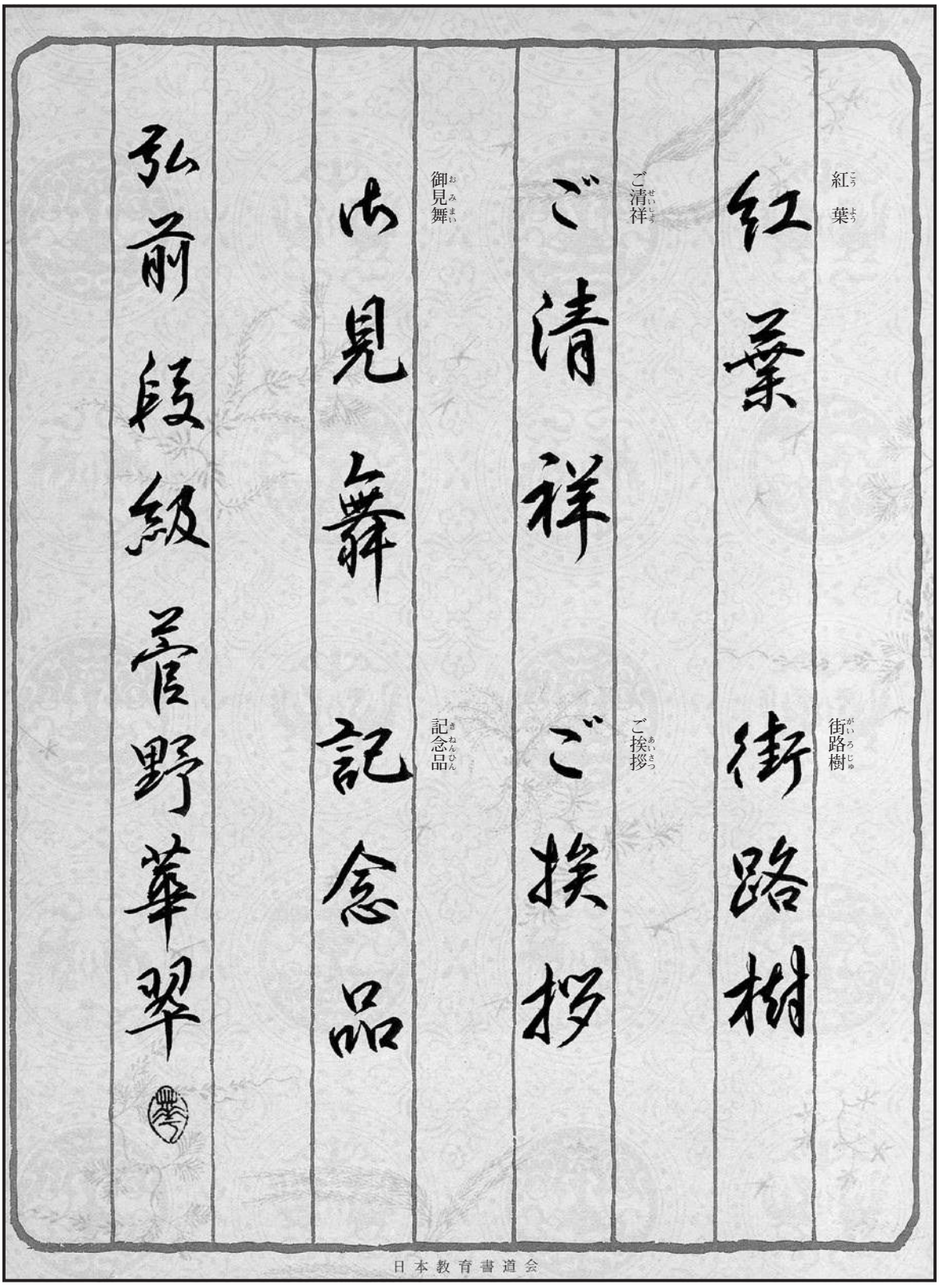
半　切（約136×約35センチ）

半切検定課題原寸大手本
500円で販売しております。

注　意

漢字半紙部門と段級位は異なりますので漢字条幅部門の段級位をご記入下さい。なお、初めて出品の人は新とお書き下さい。
支部名・段級位・氏名は鉛筆で左下に記入下さい。

※出品段級位（実用課題 新級～五段）



※**弘前**の部分には**支部名**を書く

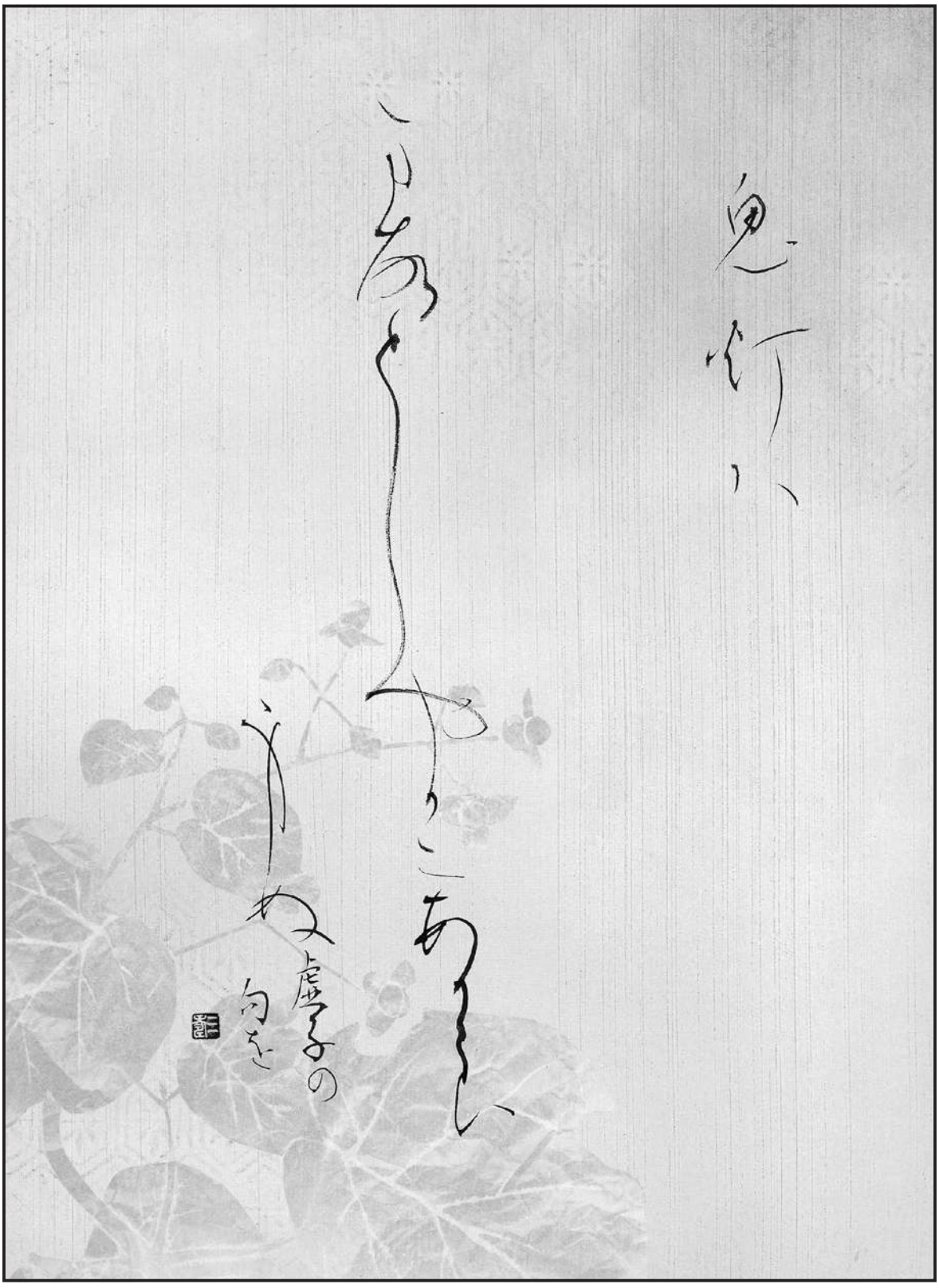
「実用課題」は、段級位認定証を発行しております。（支部長先生は支部長手帳のP21をご覧下さい。）

使用筆（寿無涯）・使用紙（調和体用紙）・使用墨（書芸呉竹〈固型〉）

10月号　　かな課題(かな半紙部)　　湯川三壽先生書

《 俳 句 課 題 》　　※出品段級位（かな半紙部 新級～八段）

◎鬼灯八万故(はまこ)としや可二(かに)あ◎可良身(からみ)ぬ　虚子の句を（◎は墨つぎ）



読み―鬼灯(ほおづき)はまことしやかに赤(あか)らみぬ（高浜虚子）
意味―鬼灯の実の色は作りもののように赤く色付く。そのとりつくろったような鬼灯の色を、ひややかに眺めている。

注意→支部名・段級位・氏名は鉛筆で左下に記入下さい。

※19ページに解説があります。

使用筆（南風）・使用紙（かな用料紙）・使用墨（天衣無縫〈固型〉）

かな条幅課題

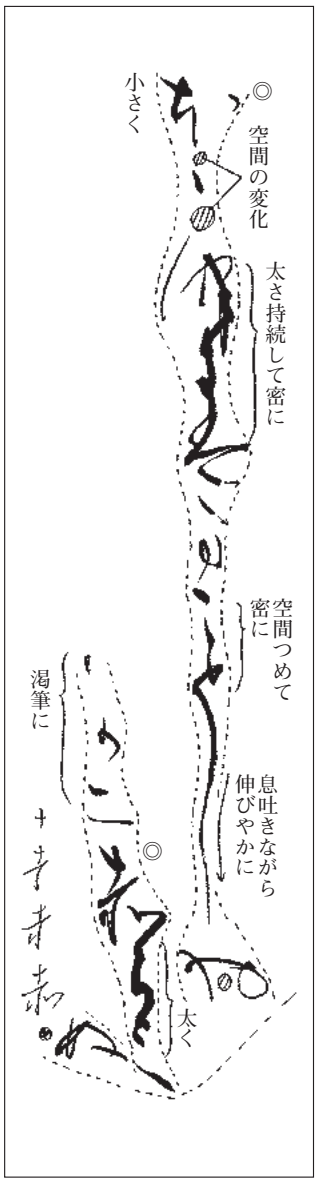
かな条幅部
※出品段級位（新級～八段）

連綿線は運筆の関係で、紙が紙面に表れるものと、表れていないものとあります。線の連続していないものを連綿線というのは、おかしく思われるかもしれませんが、筆が紙とすれすれに通ったとき、勢いがついて筆がとんだ時、線が表れない時もあります。しかし心は通っているのだから、形で表れているものと変わらないのです。気持ちの上でつながっているのだから、意連とも言われています。

連綿線は書く人の気分に左右されて続くのであって、一定した「続き方」というものはありませんが、かなの美の要素であるから変化を持たせ、楽しんで書きこんでいきたいものです。

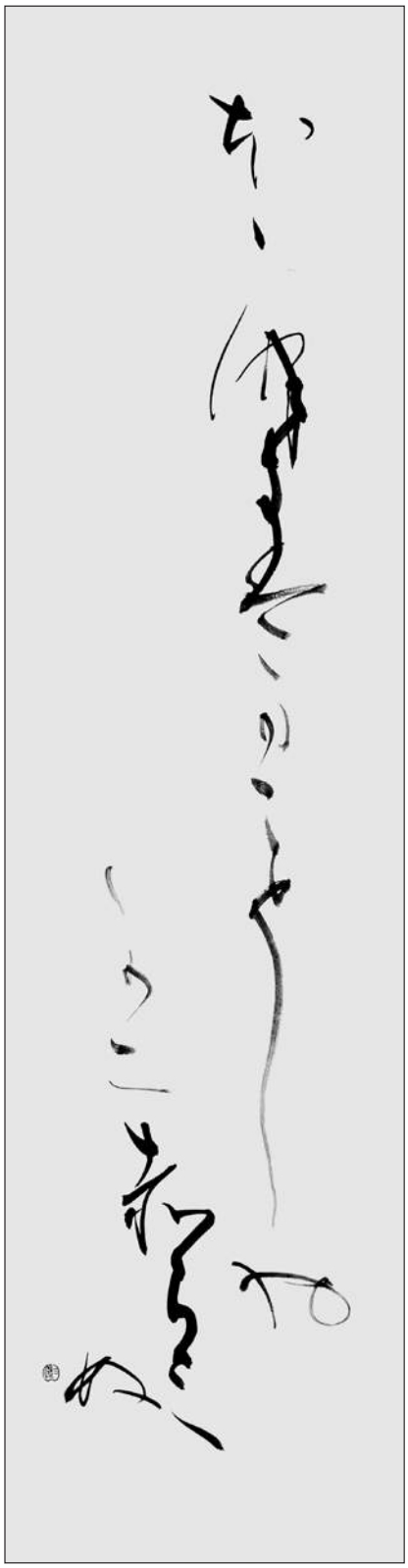
『書は平面の芸術ですが、墨の潤渇によって立体的に表現することが出来ます。潤筆部は近景、渇筆部は遠景となります。書作の時はいつも反古紙を側に置いて、筆に含む墨量を調節（拭きながら）して書きましょう。渇筆では、線が消えないようにゆっくり運筆して下さい。』

（『　』内は湯川三壽先生より）



使用筆（雅）・使用紙（かな条幅用紙半切・桂風）・使用墨（天衣無縫〈固型〉）

湯川三壽先生書



（◎印は墨つぎ）

〔本◎丶津支盤（つきは）万ことしや可二（かに）赤ら三（み）ぬ◎〕

読み―鬼灯（ほほづき）はまことしやかに赤（あか）らみぬ（高浜虚子）

意味―鬼灯の実の色は作りもののように赤く色付く。そのとりつくろったような鬼灯の色を、ひややかに眺めている。

半　切（約136×約35センチ）

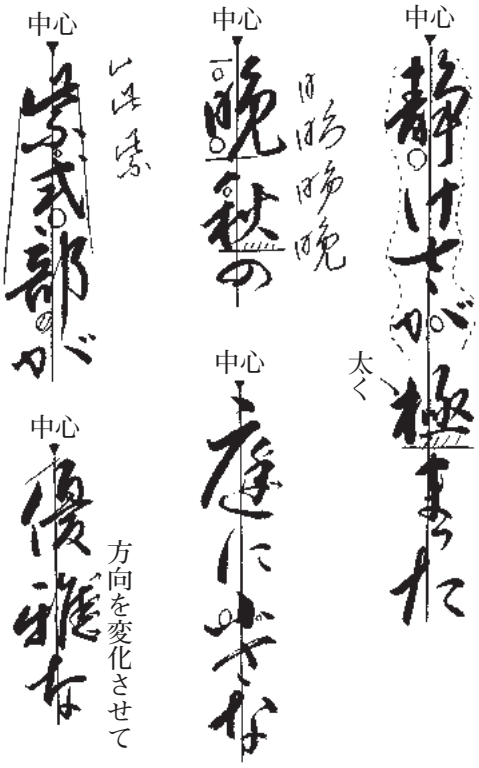
半切検定課題原寸大手本
500円で販売しております。

注　意

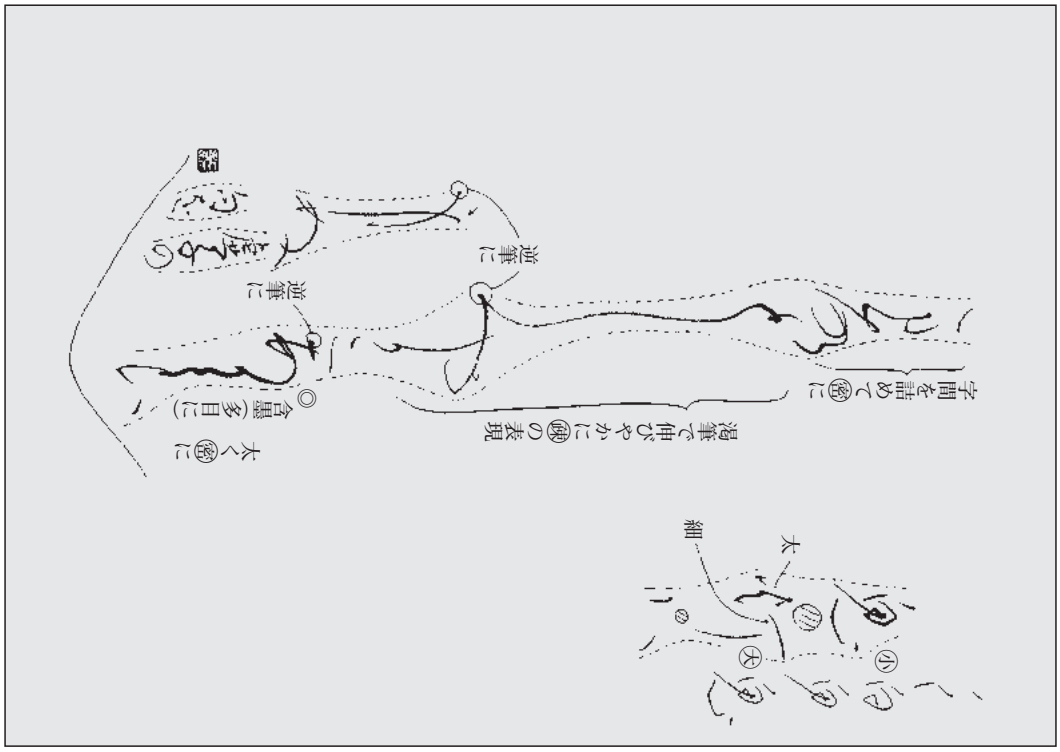
かな半紙部門と段級位は異なりますのでかな条幅部門の段級位をご記入下さい。なお、初めて出品の人は新とお書き下さい。
支部名・段級位・氏名は鉛筆で左下に記入下さい。

中字課題解説

調和体課題解説



かな半紙課題解説



(◎印は墨つぎ)